

昨年4月、私は地元の地域防災グループの仲間とともに、令和6年能登半島地震の被災地の一つである石川県珠洲市馬縹（まつなぎ）町を訪れる機会を得ました。その時、自主避難所の事務局を務めた國永英代さんに当時の様子を伺うことができたのです。

地名に「縹（きずな）」の文字を抱くこの小さな海辺の町は、2年前の元日、激しい揺れとともに世界から切り離されました。道路は寸断され、通信も途絶、停電29日間、断水はなんと5か月にも及んだそうです。

絶望的とも言える状況のなか、住民の皆さんは自主避難所を開設し、運営に乗り出しました。その際に住民たちの心を支えたのは、日々の営みの中にある「食」の温もりと「伝統文化」の灯火でした。

元日の発災という不運を、住民たちは幸運へと転じました。避難所に住民たちが持ち寄ったのは、それぞれの家で新年を祝うために用意されていた食材です。また、海辺の町ならではの豊かさがありました。アワビやサザエ、ナマコなどを収穫したのです。

避難所で催された「サザエ抜き大会」では、手元を動かす住民たちの間に自然と笑い声が広がったそうです。郷土

料理の「いもだこ」や「カジメのかす汁」が食卓に上るたび、人々は避難生活のなかでも日常を取り戻していきました。共に同じ鍋を囲んで地元の味を確かめ合う。それは、傷ついた心を互いに癒すことでもあったでしょう。

能登の孤立集落が

教えてくれた「本当の豊かさ」

松尾 和光

（まつお かずみつ／
静岡市在住）

避難所には時折、誇り高い音が響き渡りました。住民の誕生日を祝う集いで、伝統芸能の「キリコ太鼓」が打ち鳴らされ、「砂取節」が歌われたのです。太鼓の音は、先祖代々この厳しい自然と共に生きてきた人々の血を沸かせ、明日を生きる勇気を与えたことでしょう。過酷な避難生活の只中にあっても、住民の皆さんは楽しみ豊かに生きることを諦めませんでした。

春になり、道路が次第に

修復されてボランティアたちが全国からやって来ると、馬縹の人々は避難所内にボランティア用の宿泊スペースを設けて、「海の幸、山の幸」で温かく迎え入れました。行政の管理の下にある指定避難所では決してできない柔軟な運営です。

ボランティアたちが馬縹を去るとき、國永さんは、「また来てね!」という思いを込めて、自ら収穫した「縹ワカメ」をお土産に渡しました。食と伝統文化を通じた心の交流は、多くのリピーターを生む強い縹になったようです。

馬縹自主避難所の物語が私たちに教えてくれるのは、本当の豊かさとは何かということです。過酷な状況にあっても、人は美味しいものを分かち合い、共に歌い、踊ることができるとのことです。

訪問を終えて、気が付けば私も、再び馬縹町を訪ねたいと惹かれている、縹で結ばれた一人になっていました。



自主避難所となった珠洲市自然休養村センターで國永さん（右奥）に当時のことを伺いました。